

リスク社会論という虚構

——情動的リスク認知、文化的再帰性、リスク文化論——

山形大学 伊藤嘉高

日々のリスクマネジメントの現場から、医療不信、さらには原発問題まで、リスクの所在、リスクの程度、リスクへの対策をめぐって、しばしば大きなコンフリクトが生じ、あるいは不可視化されている。これらの問題に対して、専門家たちのあいだでは、ときとして素人の無知蒙昧を嘲るといった態度も認められる。

しかし、リスクは確率計算的に（すなわち期待値の計算によって）受容できるとする専門家の見方は、神経経済学などによって実証的に否定されている。リスク認知は情動的判断のうえに成り立っているのだ（5%と計算されてもなお、人は5%の意味を問わずにはいられない！）。リスク文化論は、計算可能性に回収されることのない情動的判断の社会文化的要因を探究するものである。

*

メアリ・ダグラスによれば、ある人間の情動的判断は、その人間が拠って立つコスモロジーを正当化するかたちで作用している。別の言い方をすれば、コスモロジーを正当化するために、特定のリスクが過大評価され特定のアクターにその責任を押しつける情動的バイアスが働くのである（例：不良少年の扱い）。

ダグラスは、そうしたコスモロジーの違いによってヒエラルキー型、平等主義型、個人主義型、宿命論型という発見装置としての文化類型を展開している。ヒエラルキー型（官僚、大企業）はリスクの過小評価、形式主義を生み出し、平等主義型（ラディカルな環境保護団体）は人為的リスクを過大評価し自然を神聖視し、個人主義型（市場）はリスク・ベネフィットを評価する一方で恣意的解釈を生み出し、宿命論型は責任不在に陥る。リスクマネジメントの場合にも、一つひとつの手法に文化的バイアスがかかっており、その管理自体がリスクを生む要因となっている。

ベックやギデンズらのリスク社会論は、再帰性概念に依拠して、そうした情動的バイアスを乗り越えようと企図しているように読み取れなくもない。しかし、実際のところ、彼らの再帰性は、新たな生活不安、専門知のゆらぎに曝された一般市民による経済合理的な選択の結果もたらされるものである。こうした経済合理的にリスクを扱えるとする態度は、リスク文化論からすれば、個人主義的バイアスに縛られており、人びとの多様なコスモロジー、情動、アイデンティティを切り捨てるものである。自然破壊や原発稼働のリスク認知のゆらぎは、そのコスト・ベネフィットによる比較考量の違いによって生まれているものではない。その背景には自然のコスモロジーの対立があるのだ。そして、非経済合理的な情動こそが、再帰性の条件をなしているのである。

ところが、「リスク」という科学性を帯びた言説によって、これらの文化的バイアスが中性化され、合理的な討論による合意が可能という「虚構の多元主義」が生まれてしまっている。そして、文化が本質的に対抗的であることが分からないために、（モンシスター化の事象に見られるように）意図せざる争いが起こり、侮蔑がなされ、陰謀論が巻き起こり、暴力が喚起されてしまう。

*

したがって、大切なことは、自らの拠って立つ情動＝文化を認識し、文化の多元性を認め、コンヴィンショナルな文化的再帰性を働かせ続けることである。文化的コンフリクトが認識されなければ、ダイアログとは名ばかりであり、その実、モノログをぶつけ合っているにすぎない。そして、このことは、専門知の普遍性とローカル・ノレッジの特殊性との境界を超える新たな再帰的公共知の条件でもある。